



農産物輸送のエキスパート。
独自技術で消費者へ
「新鮮」を届ける。

株式会社福岡ソノリク

ふく
おか

代表取締役社長
園田 壽俊氏

その

だ

ひさ

とし

取引店／福岡銀行鳥栖支店

■会社概要

創業・設立:1992年／所在地:佐賀県鳥栖市／資本金:6,750万円／
従業員:193名／事業内容:一般貨物自動車運送事業、第一種利用
運送事業、青果販売業、倉庫業、リース業、太陽光発電事業／事業
拠点:(本社・パックセンター)佐賀県鳥栖市(支社・営業所)福岡県糟屋
郡粕屋町、鹿児島県鹿児島市、岡山県倉敷市、兵庫県神戸市、沖縄
県那覇市(持株会社・関連会社)株式会社園田総合ホールディングス、
有限会社ソノリク保険サービス、株式会社福岡ソノリク昂進輸送、株式
会社福岡ソノリク岡山食品輸送、株式会社インターハーベストジャパン



本社前(左から園田社長、柴戸頭取)

集荷・保管・加工・輸送まで 特許の冷蔵倉庫で付加価値を

新鮮でみずみずしい野菜や果物が一年を通して小売店の店頭に並んでいます。収穫シーズンでもないのにこうした生鮮農産物が店頭に並ぶようになったのは、生産農家の方々の努力はもちろんですが、私たち輸送業界の地道な取り組みが支えていると言っても過言ではありません。

我が社は北海道から沖縄まで、農産物に特化した小口輸送の専門会社です。輸送といってもただ輸送するだけでなく、集荷から保管、加工、輸送までをすべて一貫して自社で行っており、特許を取得した冷蔵倉庫をはじめ、西日本一の規模を誇るCA（空気調整）冷蔵倉庫を保有し、付加価値の高い物流を担っています。

数ある設備の中でも特徴的なものが、2017年（平成29年）に「食品保管方法及び食品保管倉庫」として特許を取得したエチレンガス換気型冷蔵倉庫です。農産物は収穫後にも自らエチレンガス（※）を放出することで熟成し、老化し、腐敗してしまいますが、エチレンガスの比重が空気よりも軽いことを利用して、冷蔵倉庫上部にエチレンガス換気口を設置し、エチレンガスを強制的に排出させるようにしました。さらに鮮度維持のための超音波式加湿器により湿度もコントロールしています。これらの

設備により、例えば安納芋の場合、品質を劣化させることなく1年間保管できるようになりました。

特徴的な設備は他にもあります。アメリカで開発されたCA冷蔵倉庫で、その数も西日本一の規模で導入しています。通常、収穫された農産物は、呼吸を行うため、鮮度は次第に劣化していきますが、CA冷蔵倉庫は倉庫内の酸素割合を通常の20%前後から農産物の品種ごとに1~7%に調整することで、この呼吸活動を抑制し、農産物を休眠状態にさせることで鮮度を維持し、芋のでんぷん質を糖化させています。

こういった設備によって農産物をベストな状態で消費者にお届けでき、また品種によっては販売時期をずらすことによって高価格で販売することも可能になりました。

（※）かすかに甘い臭気を有する無色の気体で、成長に必要な植物ホルモンの一種

困難を克服し増収を続ける 岡山、神戸にも拠点

会社の設立は1992年（平成4年）ですが、設立当初は親会社からの負債を引き継いでマイナスからのスタートであったため非常に厳しい経営が続き、また思うように業績は伸びず、銀行からの資金調達も困難であったこと





園田社長

からいろいろと苦勞する状態が続きました。

転機になったのが2001年(平成13年)に本社を福岡県三輪町(現・筑前町)から鳥栖市に移転したことでした。翌年には岡山食品輸送を子会社化し、続いて鹿児島営業所を開設、2007年(平成19年)には敷地約2万1,600㎡、延べ床面積約1万112㎡の本社社屋を建設しました。

2010年(平成22年)、本社近郊に完成させた「パックセンター」には5室の冷蔵倉庫のうち4室のエチレンガス換気型冷蔵倉庫(先述の特許冷蔵庫)を設置し、収穫したばかりの農産品の鮮度を長期間保てるようにしました。

さらにお客様の要望にきめ細かく対応するために野菜加工室を設け、小分け、パック詰め、

箱詰めまで一連の加工作業をした後、配送する

一貫物流体制も実現しました。お客様にとつては人件費の削減、設備投資の負担軽減といったメリットがあり、また徹底した衛生管理によって消費者の方々にも「安心・安全」をお届けしています。

2017年(平成29年)に開設した岡山物流センター(岡山県倉敷市)は西日本エリアの農産物を集約する新しいネットワークの拠点と位置づけ、4室のエチレンガス換気型冷蔵倉庫、6室のCA冷蔵倉庫を設備し、青果物加工室などを備えました。

そして今年1月、関西物流センター(兵庫県神戸市)が完成。これまでに蓄積した技術と知識、経験を集大成して完成した大型施設です。9室の特許冷蔵倉庫、7室のCA冷蔵倉庫、20基のバナナやアボカド、キウイなどの追熟設備などを備えた日本でも最高レベルの多目的冷蔵庫を設け、青果物の老化を防ぎ、「最もおいしい時」に消費者にお届けできるシステムとしました。今後も将来を見据えて農産物保管の技術を活用し、新たなビジネスモデルの構築にも取り組みます。

運搬車の改良で効率化

これまで右肩上がりで成長を続けてきた



8 6



4



5



7

1.今年1月に完成した大型施設「関西物流センター」(兵庫県神戸市)／2.CA冷蔵倉庫／3.CA冷蔵倉庫のコントロール室／4.キャベツのような生鮮農産物も鮮度そのままに保管／5.エチレンガス換気型冷蔵倉庫(安納芋を保管)／6.じゃがいもの袋詰め作業を見学／7.輸入ブロッコリーは冷凍保管される／8.企業メッセージ



前列左2番目から酒井専務、園田社長夫人、園田社長、柴戸頭取、大石支店長(福岡銀行)、近藤監査役

要因はたくさんあります。業界に先駆けて作業効率を上げるために重機運搬用の四軸低床トラックを冷凍冷蔵仕様の車両にするために日本で初めてメーカーと共同開発し、その後も低床ボディの採用を積極的に進め、一台の車両にたくさんの荷物を積めるようにしました。

業界では最大級の容積56m³を確保した大型ウイング冷凍冷蔵車をはじめ8t、5t、4t、J/Rコンテナ運搬台車など用途に応じて多種類の車両を配備して、積載効率を高めています。

徹底した「ミスの防止」にも取り組んでいます。ここ本社だけでも一日で1,000t、送り状は3,000〜5,000枚にも達し、さらに大型トラック1台には50枚から100枚の送り状を有し、様々な農産物が混載され、ただの1つのミスも許さないように日々指導しています。

地球環境に優しい企業を目指してアイドリングストップ運動を続け、運搬車の燃費も改善しました。全国の冷蔵倉庫の屋根には太陽光発電装置を設置し、売電を行っており、同時にソーラーパネルによる断熱効果による節電を行い、クリーンエネルギーに貢献しております。これらの積み重ねが作業効率・稼働率の向上と共にリーズナブルな運賃、お客様からの信頼につながっています。私たちはこれを

「善循環サイクル」と呼んでいます。

「ノー」と言わない 会議は効率的に最小限で

お客様からさまざまな注文があり、中には難しい要求もあります。しかし、注文を受けた担当者は無理と思っても、その場で決して「ノー」とは言わない。上司なり、私なりに相談し、たとえ難しいと思っても、何とかして対応できないか、「イエス」と言うためにはどうしたらよいかを真剣に考えて返事をします。

会社経営にとって意思統一は大切ですが、全体会議は年に数回程度としております。その代わり必要に応じて専務、常務、経理部長、総務部長、支社長とマンツーマン、または3人程度で、打ち合わせを重ねています。短いときは10分、幹部とは30分以上、場合によっては1時間以上掛けて話し合っています。トラックの事故や配送ミスがなかったか、その日の収支は、顧客の満足度は、新規の受注は、将来目標は、などさまざまなテーマで細かく話し合い、改善点が見つかればすぐに対応します。

電話や訪問による営業も行っていますが、営業の専門部署は置いていません。それでも新規のお客様が増えているのは「難しいことも引き受けてくれる便利な会社だよ」という口コミ

の力が大きいと思います。

農産物の安定供給めざし 食のビジョンを提供したい

振り返ってみると、波乱万丈の半生でした。平穏な日々はありません。これから先もどうなるのかという不安を常に持っています。その中で自分自身を支えたものは、どんな逆境に置かれても、どんなに苦しい状況でも、決して屈しない、めげない、という『負けじ魂』でしょう。

私は過去にこだわらない性格です。もともと人生は、苦しいことが9割、楽しいことは1割くらいでしょう。だからこそ逆境の中で自分自身の能力がグローアップでき、深刻な問題でも何とか解決できる、解決できないことはない、と信じています。

人間が生きていくうえで食物は最も大事で、農産物はその中心となる存在です。我が社の技術と設備、輸送体制によって、農作物を長期間保存し、安定して出荷させることで、消費者の方々の食卓を豊かにすることが、創業以来私たちの変わらぬ願いです。そのためにも期待される信頼される運送会社でありたい、食のビジョンを提供できる福岡ソノリクでありたいと思っています。

■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 柴戸 隆成



数々の独自設備の開発や加工作業も含めたきめ細かい対応で業界をリードし、新鮮な農産物を日本全国北から南まで安心・安全に届けておられます。創業以来の成長の軌跡は、技術革新や輸送の効率化に取り組んでこられた弛まない努力の証でもあります。

物流は安心・安全な食の提供の重要な要素を担っています。これからも生産者の方々の思いと一緒に農産物を運び、全国の食卓を豊かにされることを期待しております。



水と、人と、環境と。

次世代のために、地球環境を考え、
明るい未来を創造します。

くまもと
りきゅう
すい
こう
ぎょう
株式
会社
熊本利水工業株式会社

代表取締役社長
まえだ かずゆき
前田 和幸氏

取引店／熊本銀行 植木支店
福岡銀行 熊本営業部

■会社概要

創業・設立:1983年／所在地:熊本市北区／資本金:2,000万円／
従業員:71名／事業内容:各種プラント工事施工、水道施設工事施工、
機械器具設置工事施工、噴水装置設計施工、さく井及び温泉掘削
工事設計施工、土木工事施工、建築工事設計施工他／事業拠点:
(本社)熊本市北区(支店・工場)熊本市北区、熊本県山鹿市・菊池
市・玉名市



植木工場前(左から前田社長、竹下頭取)

脱サラして起業 社長1人の不転転のスタート

我が社は1983年(昭和58年)1月、その前年末に退職した私が設立しました。大学を卒業して就職したのは、佐賀に本社を置く老舗の水関連総合エンジニアリング企業。50人余が並ぶ入社式で、最初に呼ばれて渡された辞令には「本社管理本部」とありました。

入社面接で要望したのは営業職。「希望の仕事と違います」と、入社の辞退を申し出たところ、再議が行われ、結果的には熊本支店営業課への配属となりました。水道施設、畑地灌漑、揚水施設、さく井工事等の営業に奔走し、一方で積算などの技術的な知識を、先輩・上司に教わり、また夜遅くまで自学しました。29歳の時に再度、専務より管理部勤務を要望され、3年程頑張りましたが条件(約束)を又もや反故にされ、独立を決意しました。

破格の特進を示して慰留されましたが、約10年間で会社勤めを切り上げ、33歳で起業しました。「水に関わる事業で、身を立てよう!」と、意気軒昂でした。しかし、当初は熊本市植木町の国道沿いの40㎡程度の事務所、事務員を募集するも応募者がなく2ヶ月程は母が来てくれたという貧相な状態でした。

経営資源であるヒトは私1人、カネは父親ら9人の株主から募った資本金500万円、モノは中古のトラックなど車両3台、パイプレンヂ(6本組)などわずかな工具だけというスタートでした。

大型水処理プラント、温泉掘削： 兄弟を中心に事業を拡大

管工事、さく井工事の建設業許可を取得し、当初は地元の畑地の既存の灌漑設備の修理が中心でした。数万円〜数十万円の雑工事が多く、運転資金を心配することもありましたが、不眠不休で奮闘。開業の年の秋には、観光ホテルの温泉給湯配管、温泉掘削工事を受注し、その社長(故人)から「温泉掘削の名人」と喜ばれ、多くのお客様を紹介していただきました。その後、特命の仕事もいただき、長いお付き合いをさせていただきました。

創業2年目の夏には、実弟の中山寛(現取締役統括工事本部長)が、大阪の水処理メーカーを辞めて入社。水処理プラント工事の経験を生かし、農業水利施設や給排水衛生、空調換気、浄化槽など管工事のほか、下水道処理場などの大型機械器具設置工事、電気工事、噴水装置、太陽光発電システム、建築工事





前田社長

と業容を拡大してまいりました。

創業4年目には社員が増え、倉庫・作業場も必要になり、自社用地に事務所・工場兼倉庫を移転建設。平成になってから2回移転し、2000年(平成12年)に現在地に本社を構えました。業容拡大に伴う各種事業許可と併せて、特定建設業許可を受け、大型工事の元請に力を入れ、年商は創業1年目の5,500万円が現在では20億円超になっています。

指定管理者や住宅建築 新規事業に次々挑戦

こうした中で、新規事業に次々と挑戦。2006年(平成18年)、公共施設の指定管理

者制度が導入されたのを機に、県営八代運動公園(熊本県八代市)の指定管理者に応募して選ばれました。受託は5年更新で、現在3期目となり、施設全体の運営・維持管理、各種スポーツ教室を開くなど「日本一の運動公園」を目指しています。

建築では、一般建築工事と住宅事業を行っています。住宅はオリジナルブランドの「ウェルホーム」とフランチャイズ(東京)のログハウス・木の家「BESS」の二つのブランドで事業展開。独自の温度・湿度コントロールシステムで年中快適環境の「ファースの家」や、生活を楽しむ個性たっぷりのBESSの家の数々が人気を集めています。

また、全国でも数少ない噴水装置工事業者、九州で唯一の日本水景協会正会員として、様々な水景施設(噴水、滝、壁泉、人工せせらぎ、ミスト噴霧など)を手がけ、設計・製作・施工・メンテナンスまで全てを担っています。

更に7年前に9人の出資者からなるコンソーシアム「南阿蘇水力発電株式会社」(代表取締役 前田和幸)を立ち上げ、7年目にして今秋着工の運びとなりました。この小水力発電の第一号に続き、他に200kwクラスの発電所3ヶ所、低圧(50kw)1ヶ所を目下、建設推進中です。



7 5



4



1. 植木工場内で記念撮影／2. 工場の溶接作業風景／3. 工場見学風景／4. ログハウス・木の家「BESS」。三角天井の大空間ロフト。木に囲まれた中にポイントカラーの壁がアクセント／5. 「BESS」薪ストーブを標準装備した遊び心溢れる室内／6. 「BESS熊本」住宅展示場／7. 企業メッセージ

6





前列左5番目から中山取締役工事本部長、前田社長、竹下頭取、江良支店長（熊本銀行）

2008年（平成20年）には、保険募集業に参入。熊本市北区に「街の保険屋さんライフサロン熊本くすのき店」を構えました。熊本地震の際は、ライフサロンのお客様の地震保険加入率は80%を上回っており、特に家財保険から多く支払われ、たくさんの方に大変喜んでいただきました。

高品質のモノ・サービス 社員の意識を「一つ」に

企業が生き残り、成長するには、やはり「品質」と「信頼」が大切です。創業3年目に、当時の化学及血清療法研究所（化血研）から受注した生化学プラント工事では、高度な技術・技能が必要なワクチン製造プラントの複雑な配管工事をこなし、「蓄積した技術と新しい技術で社会貢献」を掲げる我が社の記録に残る特殊工事の一つになりました。

品質への取り組みは、高品質のモノ・サービスを提供するお客様第一を「経営者の品質方針」とし、それぞれの現場で徹底。2000年（平成12年）には、品質保証の国際規格ISO9002（後にISO9001に移行）をいち早く取得しました。

これに先立ち、環境認証「エコアクション21」

も取得しました。実績に裏付けられた我が社の技術力・品質力は、精度の高い配管のスピーディーな施工、温泉掘削の成否を決めるといわれる止水の高い技術、デザイン・イメージなど感性豊かな噴水の設計・施工……などとして、多方面から高い評価を受けています。

しかし、業務内容が拡大、例えばホテル、病院、学校などのプール・浴場施設、更には除鉄、除マンガン、除アンモニアの急速ろ過装置製造・販売など幅広い営業展開となり、自分の携わる分野のことしか分からない社員も出てきました。社員の意識が「一つでない企業の発展はありません。社内報「りすい」を発行して、私の所信や各部門の工事実績などを紹介、職場の仲間がお互いを紹介し合う「りすいの輪」を特集して、立場・職種を超えての理解を深めています。

建築工事部門を強化 プラント工事は関東進出へ

我が社は過去取り組んだ事業で住宅用太陽光発電システム販売を、県下でいち早く参入し、実績を上げました。その後、新たに登場した産業用太陽光発電は、全国的に急激な普及となり、電力会社の買い取り対応が困難に

なっています。住宅用太陽光発電システムは、固定価格買い取り期間の満了に伴い、住まいに合わせた電気の全量自家消費型太陽光発電が関心事になっています。

今後は省エネ住宅を扱うウエルホームやBESSの家の販路を拡大、住宅事業を中心とする建築工事部門を強化します。我が社の経営の大きな柱として、2020年には部門売上20億円を達成する目標を掲げています。プラント工事部門は、関東地区に新たな拠点を設けて進出し、現地で人材を確保し、下水道処理プラントや、大型揚水施設工事、ごみ処理プラントなどを手がけたいと検討しています。

将来に向けては、培った技術・技能の熟練社員から若手社員への確実な継承も課題です。OJT（職場内教育）やOFFJT（職場外研修）を充実させ、家族を含めた国内外への社員旅行、待遇改善など福利厚生にも経営資源を投入します。深刻化する人手不足、五輪後の先が見えない業界環境の中で、社員が一丸となって「品質を落とさずにコスト削減を図り、所定の利益を確保する」健全経営を進め、より多くのお客様に喜んでもらえる企業でありたいと思います。

■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 竹下 英



古代より人類は、水のある所に住み、文明を発展させてきました。熊本利水工業様は、その社名通り水の適切な利用を図る事業を展開され、品質と信頼で多くのお客様に愛される企業に成長されました。

今後は、プラント部門の関東地区進出、省エネ・快適住宅を中心にした建築工事部門の強化などで更なる進展を目指しておられます。果敢な挑戦と硬軟織り交ぜたリーダーシップで、目標を達成されることを期待しています。



より快適に、より優しく。
発泡スチロールの可能性は、
限りなく拡がり続ける。

九州化成工業株式会社

代表取締役社長
濱 浩二 氏

取引店／親和銀行
諫早中核団地支店

■会社概要

創業・設立:1985年／所在地:長崎県諫早市／資本金:1億5,000万円／従業員:54名／事業内容:発泡プラスチック製品の製造・販売、太陽光発電による売電／事業拠点:(本社工場)長崎県諫早市(支店)福岡県糟屋郡粕屋町／関連会社:山陰化成工業株式会社、株式会社ソーラーステーション(鳥取県境港市)



本社工場前(左から濱社長、吉澤頭取)

巻き網漁業で山陰に進出

誘われてふるさと諫早でも起業

我が社は長崎県諫早市の諫早中核工業団地で発泡スチロール等の製品を製造・販売しています。この工業団地で事業を開始したのは1985年(昭和60年)のことですが、その創始は現在89歳になった父・信義(のぶよし)が20代の頃に遡ります。

諫早市出身の父は関東の大学を卒業後、祖父・久米八(くめはち)が長崎を基地に営んでいた巻き網漁業に携わりました。しかし、1952年(昭和27年)、韓国による「李承晩ライン」の設定により東シナ海の操業海域の縮小、日本漁船の拿捕(だほ)が相次ぎました。そこで父達は、日本海、道東沖、三陸沖で巻き網漁場を開拓し漁業権を取得しました。本拠地を鳥取県境港市に移転し、大型巻き網漁業の他、ニュージーランド沖でのイカ漁、大和堆(やまとたい)でのカニ漁、冷凍冷蔵事業、石油製品販売業、船舶修理業などを事業化しました。さらにその頃、発泡スチロール製のトロボ箱(※)が全国の魚市場で普及し始めたのを知った父はその商機を捉え、1980年(昭和55年)に境港で「山陰化成工業株式

会社」を設立し、発泡プラスチック製品の製造・販売を開始しました。

山陰で順調に事業を続けていた父のことを知った当時の諫早市長から、長崎県が造成した諫早中核工業団地への進出の誘いを何度も受けたことから、世界最大の総合化学メーカー・BASF社(ビーエスエフ)(ドイツ)の日本人からの出資を得て「九州化成工業株式会社」を設立しました。父にとっては、「ふるさと振興」という思いもあつての決断だったと思います。

私は境港市で生まれ育ち、大阪の大学で経済学を専攻しました。卒業後はBASF社に入社し、三菱油化株式会社(現・三菱ケミカル株式会社)との合併会社の研究所(三重県四日市市)で発泡スチロールの応用研究を行い、25歳の時に我が社に入社しました。入社後は経理の仕事から始め、営業の経験を積んだ後、経営に携わり、現在「九州化成工業」「山陰化成工業」の両社の代表を務めています。

(※)魚を入れ運ぶための魚箱。それまでは主に木製だった



2 1

3





濱社長

優れた特性の発泡プラスチック さまざまな製品を展開

発泡スチロールとは、炭化水素ガスを含んだポリスチレンビーズを100℃～120℃の高圧蒸気により発泡、成形し製造します。体積の98%が空気のため、超軽量で、断熱性や緩衝性さらに耐水性に優れており、金型の形状によりさまざまな形に成形できるなどの特性があります。同様にポリエチレンを原料に、より高強度で耐油・耐薬品性にも優れるのが発泡ポリエチレンです。これら発泡プラスチックと呼ばれる製品は他にも種類がありますが、

我が社ではこの2種類の製品を製造しています。

設立からしばらくはトロ箱など水産関係の容器を主に製造していましたが、1990年代になると、東シナ海を漁場にする以西底引き網漁の水揚げが減少し、拠点である長崎の水産業にはひと頃の勢いはなくなっていました。この窮地から脱出するため、容器の他に、水耕栽培用ベッド、建築資材として断熱ボードや自動車向け部材、精密機器の緩衝材、海洋設置物の浮力体など、発泡スチロール・発泡ポリエチレンの特性を活かしたさまざまな用途へと製品展開を進めました。

拡がる取引先 建築資材や超精密機器容器まで

数百種類に及ぶ我が社の製品の中には、独自に開発した製品が多くあります。構造設計会社との共同開発により、マンション各階層の天井スラブに発泡スチロールを埋め込むことで天井梁の凹凸をなくし、かつ遮音性を高める工法「中空コンクリートスラブ工法」の特許を取得し、現在では日本全国のマンション等で



8 6



1.工場内部を見学／2.3.発泡スチロールの原料になるポリスチレンビーズ／4.発泡機。高圧蒸気により発泡する／5.シリコンウェーハ用容器は温度調整により寸法を安定させる／6.使用済みの発泡スチロールはインゴットにしてリサイクルされる／7.自動車向け部材の用途を濱社長が説明／8.企業メッセージ



九州化成工業株式会社



前列左4番目から濱社長、吉澤頭取、八尋支店長(親和銀行)

採用されています。

半導体用シリコンウェーハの製造・販売大手の半導体関連メーカーから、半導体の基盤であり物理的・化学的に安全、かつクリーンに搬送・保管しなければならないシリコンウェーハ用の容器を受注しています。大手メーカーからの発注をいただいたことは、社員の士気にも繋がっています。

こうした製品の開発・設計、製造・販売を通じてお付き合いいただいている業界は、農水産業、自動車、電機、建築・土木、食品、物流等多岐にわたり、年間で大型トラック5,000台分相当のさまざまな大きさ・形・用途の製品を全国にお届けしています。

リサイクルでも優れた特性 循環型社会実現に貢献

近年、捨てられたペットボトルやストローなどのプラスチックごみによる環境汚染が、世界的に問題になっています。そうした中で発泡スチロールはリサイクル特性にも優れ、さまざまな形で再生利用され、約90%という高いリサイクル率を達成しています。

全国の事業者約130社で構成する発泡スチロール協会（JEP SA）は、再資源化活動に積極的に取り組み、会員企業の一部に処理機を設置し、リサイクルを行っています。このJEP SA会員が運営するリサイクル拠点「エプシープラザ」と呼び、我が社は「エプシープラザ諫早」としてリサイクルを支援しています。

使用済み発泡スチロールのリサイクルには、大きく分けて①粉碎・減容してプラスチックの原料として再資源・再製品化するマテリアルリサイクル、②固形燃料として発電等に使うサーマルリサイクル、③油化・ガス化するなどで化学工場等の原料や燃料にするケミカルリサイクルの3種類がありますが、我が社では①のマテリアルリサイクルで回収製品を熱で溶かしてインゴット（原料の塊）にすることで、循環型社会の実現に貢献しています。

新しい用途に挑戦

命と財産を守る軟弱地盤改良にも

発泡スチロールは、使用は1回限りというイメージをお持ちかもしれませんが、しかし

近年は、より耐久性や耐熱性、耐水性がある素材との複合製品として、繰り返し使う容器や建築・土木の資材、工業製品の部材、海洋設置物などで半永久的に使われるようになりました。

軟弱地盤の不同沈下を抑えるための地盤改良には、セメント系の固化材で表層を固める方法の他、支持層まで鋼管の杭を打ち込む方法等がありますが、「コロンブス工法」という地盤置換・免震工法では、建築物の基礎下の土を取り除き、発泡スチロールを盛土材として敷き詰めることで、不同沈下だけでなく地震や液状化に対する耐久力も高く、深く鋼管杭を打ち込まなければならない場合や狭小地で重機が入らない場所でも、軟弱地盤対策を可能にしました。九州でも熊本地震などが相次ぐ中で、命と財産を守る地盤改良の進化した形として注目されています。

このように発泡スチロール等の可能性は、現在も限りなく広がっています。企業理念にも掲げた「快適な暮らしに役立つ製品づくり」を担う熱意ある従業員とともに、人々を幸福にする製品づくりにこれからも挑戦を続けてまいります。

■ インタビューを終えて

親和銀行 取締役頭取 吉澤 俊介



私たちの生活は、発泡スチロールの恩恵を多く受けており、冷蔵・冷凍食品の輸送や電化製品の梱包材の他にも、目に触れることのない住宅建材や自動車の部材に至るまで、今ではなくてはならない存在になりました。

先代の機知で得たビジネスチャンスを濱社長が現在の規模にまで拡大されてこられました。これからも貴社の持つ高い技術力と品質で、幅広い用途と高いリサイクル率の発泡スチロール製品の更なる展開を期待しています。